

推薦状

第32回翁久允賞の候補者として、2019年8月に『越中おわら風の盆の空間誌—〈うたの町〉からみた近代』（ミネルヴァ書房）を上梓された和光大学教授 長尾洋子氏を推薦いたします。以下、この近著をもとにしながら推薦の理由を述べます。

長尾洋子氏は、お茶の水女子大学を卒業し、ロンドン大学大学院 SOAS で修士課程を修了（開発学修士）。帰国後、お茶の水女子大学大学院人文学研究科でも修士課程を修了（人文学修士）した後、一橋大学大学院社会学研究科助手を経て、2002年より和光大学表現学部専任として勤務。2018年に総合研究大学院大学において学位（学術博士）を取得し、2019年4月より現職（和光大学表現学部総合文化学科教授）に就かれています。

長尾氏の専門は文化地理学で、生活空間としての地域社会に人びとが抱く意識を、歌謡や芸能などの民俗行事から解き明かすことを研究テーマとして取り組んで来られました。その研究の原点にあるのが、卒業研究でフィールド・ワークに訪れた八尾町の「おわら風の盆」であり、〈うたの町〉を視座に据えて、近代の時空間がどのように生みだされ、再編成されたかを鮮やかに描き出す『越中おわら風の盆の空間誌—〈うたの町〉からみた近代』は、これまでの研究の集大成といえる著作です。

長尾氏は、2003～2004年度にかけて、科学研究費の助成（研究題目「地方文化としての「おわら風の盆」の創造／再生産と社会的想像力」）を受けて開館後間もない八尾おわら資料館の所蔵資料の調査を行い、おわら保存会の創設者である川崎順二の残した未整理資料の特定や文献の目録化に関わって来られました。その経験に裏打ちされた、新聞・雑誌、書簡などの多くの資料データを駆使しながら、それらを単に通史的／通時的に記述するのではなく、行為とコンテキストが相互に織りなす〈空間誌〉という広い射程のもとに考察したのが本書です。いわばローカルな〈場〉の生成を論じながら、その視点から、周縁を取り込んでいく近代の言説空間の構造を暴き出すようなダイナミズムをもつ——そこに本書の大きな魅力と意義があります。

こうした本書の特徴は、コスモポリタニズムとローカリズムの両面から翁久允を論じた「翁久允—〈うたの町〉と文士をとりもつ仲介者」（第7章）にも遺憾なく発揮されています。翁の「おわら節」歌詞の選評（未刊）をていねいに読み解きながら、郷土に根ざした情緒を魂とすることで、初めて普遍性に通じ得るという思考／志向が、翁の独自のコスモポリタニズム（「世界的田舎者」）の根幹にあることを論証しています。これは「第一に村の人となり、そして県の人とな

り、国の人となつてこそ人は初めて世界の人となれる」という郷土研究誌『高志人』創刊時の翁の言葉とも響き合うものです。

また、翁久允のみならず、「おわら」の代表的な作詞者である小谷恵太郎（契月）について、当時の近代詩運動の流れの中で考察した論攷「小谷恵太郎——近代詩運動とおわらの接点」（第4章）も、詩人としての契月に関する最初の研究として特筆すべきものがあります。民謡集『仏法僧』を、情緒的な文脈ではなく地理的想像力との連関で論じた本論は、契月を再評価していく中で今後の基軸となるものといえます。

以上に述べましたように、本書に結実した長尾氏の研究は、翁久允賞審査項目を十分に満たすものであります。特に、「おわら風の盆」についての初めての本格的な研究書という意味において、審査項目のうちの(3)「富山の文化などへの社会貢献」に資するところ大であります。また、〈うたの町〉というローカルな〈場〉の生成を、民俗学・国文学・文化地理学という学際的な視野の下、近代ナショナリズムにおける「創られた伝統」研究の系譜の中に理論的に位置づけた点で、審査項目(2)「日本・世界での価値」における「普遍的価値」を有する研究にも合致するといえます。それはまさに、翁久允の理想としたローカリズムと普遍性とを見事に一体化したものであり、その名を冠した本賞にふさわしいものであります。

奇しくも本年(2020年)は、おわら保存会の創設者・川崎順二とおわらを代表する作詞者・小谷恵太郎(契月)の五十回忌にあたります。二人の業績を顕彰し、新しい時代に「おわら風の盆」を継承していく上でも、長尾氏の研究が果たす役割は大きいものと考えられます。

「おわら風の盆」に関する初めての本格的な研究書を得たことを喜ぶとともに、翁久允賞の受賞に十二分に値する候補者として、長尾洋子氏を推薦いたします。

2019年12月1日

静岡県立大学国際関係学部 教授 細川 光洋